

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。なお、この文章の筆者は、アメリカ合衆国カリフォルニア州生まれの小説家で、文中の「星条旗の聞こえない部屋」および「天安門」はこの人の作品である。

なぜ、わざわざ、日本語で書いたのか。「星条旗の聞こえない部屋」を発表してからよく聞かれた。母国語の英語で書いた方が楽だろうし、その母国語が近代の歴史にもポスト近代の現在でも支配的言語なのに、という意味合いがあつた。質問の中にあつた。

日本語は美しいから、ほくも日本語で書きたくなつた。十代の終り頃、言語学者が言うバイリンガルになるのに遅すぎたが、母国語がその感性を独占支配しきつた「社会人」以前の状態で、はじめて耳に入った日本語の声と、目に触れた仮名混じりの文字群は、特に美しかった。しかし、実際の作品を書く時、西洋から日本に渡り、文化の「内部」への潜戸としてのことばに入りこむ、いわゆる「越境」の内容を、もし英語で書いたならば、それは日本語の小説の英訳にすぎない。だから最初から原作を書いた方がいい、という理由が大きかつた。壁でもあり、潜戸にもなる、日本語そのものについて、小説を書きたかつたのである。

ほくにとつての日本語の美しさは、青年時代におおよそ日本人が口にしていた「美しい日本語」とは似ても似つかなかつた。日本人として生まれたから自らの民族の特性として日本語を共有している、というような思いこみは、ほくの場合、許されなかつた。純然たる「内部」に、自分が当然のことのようにいるという「アイデンティティー」は、最初から与えられていなかった。そしてほくがはじめて日本に渡つた昭和四十年代には、生まれた時からこのことばを共有しない者は、いくら努力しても「一生」外から眺めて、永久の「読み手」でありつづけることが運命づけられていた。母国語として日本語を書くか、外国語として日本語を讀んで、なるべく遠くから、しかしできれば正確に、「公平」に鑑賞する。

あの図式がはじめて変つたのは、もちろん、ほくのように西洋出身者が日本語で書きはじめたからではない。その前に、日本の

「内部」に在しながら、「日本人」という民族の特性を共有せずに日本語のもう一つ、苛酷な「美しさ」を勝ち取った人たちがいたからだ。

日本語の作家としてデビューしてまもない頃に、在日韓国人作家の李良枝から電話があった。李良枝は、「由熙」の舞台にもなった、「母国」での何度目かの留学を終えて東京に戻り、ぼくがジャパノロジーの別天地を捨てて、日米往還の時代を含めていくつ目に移住した新宿の木造アパートと、さほど遠くない場所に移ることになった。「韓国人」の日本文学の先輩が「アメリカ人」の日本文学の新人をゲキレイしてくれる、という電話だったのだが、話しが弾み、そのうちに、「由熙」の主題でもあった、日本語の感性を運命のように持ったために、「母国」の言語でありながら「母国語」にはならなかった韓国語について、ぼくがたずねてみた。

動詞の感覚は違う、という話しになった。韓国語では、日本語と比べて、いわゆる「大和ことば」に相当するような動詞を使わないで漢字の熟語 + 하다 (する) を言うことがどれだけ多いか。ソウルの学生が交わす白熱した議論の中でたびたび問題にされる「うらざり」にしても、それを「わざわざ」漢語の「배반」つまり「背反」すると言うのは、自分の感覚とは違う、ということ
を李良枝が言った。

「日本人」として生まれなかった、そのために日本の「内部」において十分なハイジヨの歴史を背負うことになった日本語の作家が、日本の都市から「母国」の都市に渡ったところ、そこで耳に入ることばは、漢語と、土着の、日本語風に受けとめれば「仮名的に響く表現のバランスが、どうしても異質なものとして聞こえてしまう、と。

あの会話をした日から一ヶ月経って、李良枝は急死した。ぼくの記憶の中で、彼女は若々しい声として残っている。「日本人」として生まれなかった、日本語の感性そのものの声を、思い出す度に、「母国語」と「外国語」とは何か、一つのことばの「美しさ」は何なのか、そのわずかの一部を勝ち取るために自分自身は何を裏切ったのか、今でもよく考えさせられる。

そして日本と西洋だけでは、日本語で世界を感じて日本語で世界を書いたことにはならない、という事実にも、おくれればせ

がらあの頃気づきはじめた。

日本から、中国大陸に渡り、はじめて天安門広場を歩いたとき、あまりにも巨大な「公」の場所の中で、逆に私小説的な語りへと想像力が走ってしまった。アメリカとは異った形で自らの言語の「フヘン性」^cを信じてやまない多民族的大陸の都市の中を、歩けば歩くほど、一民族の特性であると執拗^{しつぎょう}なほど主張されてきた島国の言語でその実感をつづりたくなかった。まずは、血も流れた大きな敷石の踏みごたえと、そこに隣接した路地の、粘土とレンガを固めた塀と壁の質感を、どうすれば日本語で書けるか、という描写の意欲を覚えた。そのうちに、アメリカ大陸と中国大陸の二つのことばをバイタイ^dとした感情が記憶の中で響く一人の主人公の物語を、想像するようになった。

古代のロマンではなく同時代の場所としての中国大陸の感觸を日本語の小説で体现するという試みは、半世紀前に、上海に渡っていた武田泰淳にも、また満州に渡っていた安部公房にもあった。一九九〇年代に日本から渡ったとき、その半世紀間に繰り返し返された断絶の痕跡^{こんせき}としてラディカルに変えられた文字の異質性を、まず受け止めざるをえなかった。「東」や「丰」や「乡」という形体がいたるところでこちらの目に触れて、それが「매반합니다」^e、背反、します、という声が在日作家の耳に入ったときとは、またズレの感觸が違うだろう。私小説はおるか小説そのものからもっとも遠く離れた、すぐれて「公」の場所、十億単位の人を巻きこんだ歴史の場所で、その歴史に接触してホウカイ^eした家族の記憶が頭の中で響いている。そうした一人の歩行者のストーリーを、どのように維持して、書けるのか。日本から、北京に渡り、その中心を占める巨大な空間を歩きながらそう考えたとき、母国語の英語はもはや、そのストーリーの中の記憶の一部と化していた。

北京から東京にもどった。新宿の部屋にもどった。アメリカ大陸を離れてから、六年が経っていた。新宿の部屋の中で、二つの大陸のことばで聞いた声を、次々と思いだした。「天安門」という小説を書きはじめた。

二つの大陸の声を甦^{よみがえ}らせようとしているうちに、外から眺めていた「Japanese literature」すら記憶に変わり、世界^オがすべて今の、日本語に混じる世界となった。

〔注〕 ○ポスト近代——ポスト (post) は「後の」「次の」の意味。近代の終わった後のこと、または次に来る時代。

○バイリンガル——二言語使用 (bilingual)。

○アイデンティティ——本人であること、また、その自己認識 (identity)。

○李良枝——文中の作品『由熙』を書いた小説家 (一九五五—一九九二)。

○ジャパノロジーの別天地——かつて筆者はアメリカで日本学 (Japanology) の研究と教育に携わっていたことがある。

○武田泰淳——小説家 (一九二二—一九七六)。

○安部公房——小説家 (一九二四—一九九三)。

設問

(一) 「だから最初から原作を書いた方がいい」(傍線部ア)とあるが、筆者が日本語で小説を書こうとした理由はどこにあると考えられるか、わかりやすく説明せよ。

(二) 「おおよその日本人が口にしていた『美しい日本語』」(傍線部イ)とあるが、ここにいう「美しい日本語」とはどのようなものか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「一生「外」から眺めて、永久の「読み手」でありつつける」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

第二 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

九条民部卿顯頼のもとに、あるなま公達、年は高くて、近衛司を心がけ給ひて、ある者して、「よきさまに奏し給へ」など言ひ入れ給へるを、主うち聞きて、「年は高く、今はあるらむ。なんでも、近衛司望まるるやらむ。出家うちして、かたかたに居給ひたれかし」とうちつぶやきながら、「細かに承りぬ。ついで侍るに、奏し侍るべし。このほど、いたはることありてなむ。かくて聞き侍る、いと便なく侍りと聞こえよ」とあるを、この侍、さし出づるままに、「申せと候ふ。年高くなり給ひぬらむ。なんでも、近衛司望み給ふ。かたかたに出家うちして、居給ひたれかし。さりながら、細かに承りぬ。ついで侍るに奏すべしと候ふ」と言ふ。

この人、「しかしかさま侍り。思ひ知らぬにはなけれども、前世の宿執にや、このことさりがたく心にかかり侍れば、本意遂げてのちは、やがて出家して、籠り侍るべきなり。隔てなく仰せ給ふ、いとど本意に侍り」とあるを、そのままにまた聞こゆ。主、手をはたと打ち、「いかに聞こえつるぞ」と言へば、「しかしか、仰せのままになむ」といふに、すべていふはかりなし。

この使にて、「いかなる国王、大臣の御事をも、内々おろかなる心の及ぶところ、さこそうち申すことなれ。それを、この不覺人、ことごとくに申し侍りける。あさましと聞こゆるもおろかに侍り。すみやかに参りて、御所望のこと申して、聞かせ奉らむ」とて、そののち少将になり給ひにけり。まことに、言はれけるやうに、出家していまそかりける。

〔十訓抄〕

〔注〕 ○九条民部卿頭頼——藤原頭頼（一〇九四—一一四八）。

○近衛司——近衛府の武官。長官は大将、次官は中将・少将。

○かたかたに——片隅に。

○しかしかさま侍り——おっしゃる通りです。

設問

(一) 傍線部ア・イ・エ・カを現代語訳せよ。

(二) 傍線部ウを、具体的な内容がよくわかるように現代語訳せよ。

(三) 傍線部オについて、頭頼がこの侍を「不覚人」と呼んだのはどういう理由からか、簡潔に説明せよ。

〔注〕 ○堯——中国古代の聖人君主で、王位を舜に禅譲したといわれる。 ○舜——中国古代の聖人君主で、王位を禹に禅譲したといわれる。 ○禹——中国古代の聖人君主で、夏王朝の創始者といわれる。

設問

- (一) 「堯舜之伝賢也、欲天下之得其所也」を、「伝賢」の内容を明らかにしつつ、平易な現代語に訳せ。
- (二) 「伝之子而當不淑、則奈何」を、「伝之子」の内容を明らかにしつつ、平易な現代語に訳せ。
- (三) ㊦と㊧に、それぞれ文章の趣旨に照らして最も適当と思われる漢字一字を入れよ。
- (四) 「前定雖不當賢、猶可以守法」を、「前定」の意味を明らかにしつつ、平易な現代語に訳せ。
- (五) この文章の作者は、「伝人」と比べて「伝子」の長所がどこにあると考えているか。簡潔に説明せよ。